<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>L・H・モーガンとイロクォイ・リーグ: 民族学史覚書(一)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Sub Title</td>
<td>Lewis Henry Morgan and League of the Iroquois</td>
</tr>
<tr>
<td>Author</td>
<td>中村, 孚美(Nakamura, Fumi)</td>
</tr>
<tr>
<td>Publisher</td>
<td>三田史学会</td>
</tr>
<tr>
<td>Publication year</td>
<td>1986</td>
</tr>
<tr>
<td>Abstract</td>
<td>論文</td>
</tr>
<tr>
<td>Genre</td>
<td>Journal Article</td>
</tr>
</tbody>
</table>
Life of the American Aborigins, Washington, 1881
(Houses and House-
no-san-ne, or Indianions, Rochester, 1851) "The Heritage of the Ho-de-
1871,") "The House of the Human Family, Washington,
and Affinity of the Human Family, Washington,
(Systems of Consanguinity
Human Progress from Sauagery through Barba-
Ancient Society or Researches in the Lines of
"The History of the House of the Human Family, Washington, 1881
(To, Henry Morean, 1818-1881)
ドック（George P. Murdock）の企画したHRAF（Human Relation Area Files）において、最高点の五点を与えられているが、それは専門の人類学者による最も信頼すべき民族誌的資料に与えられている評価なのである。またアメリカの大学では、イロクイ族についての専門の教科書も存在する。その中には、一八八七年に、モーガン著「人類学の総説」に掲載されたイロクイ族の説明がある。

さらに、ロシアのソ連での人類学的調査として著された「人類学の総説」も、イロクイ族についての詳細な説明を含んでいる。この本は、イロクイ族の歴史、文化、社会、経済、政治、宗教などに関する広範な研究をまとめたもので、イロクイ族の研究者としての地位を占めるようになっている。

しかしながら、イロクイ族についての研究はまだ十分に行われていない。その理由の一つとして、イロクイ族の歴史が長いこと、地域が広く、文化的な多様性があること、などの問題が挙げられる。

一方で、イロクイ族の研究は、人類学的な観点からも興味深く、また、イロクイ族自身の視点からも影響力がある。今後、イロクイ族についての研究がさらに進むことが期待されている。
略記）がある。実にこの著作は「住居建築関念の発達」

（Growth of the Idea of House Architecture）のタイトルで「古代社会」の第五篇を形作るはずであった。しかし原稿がすでに一冊の分量をもっているかつ越えているとは理由で、この第五篇を削られ、四年後にワシントンの政府印刷局から出版されたのであった。モーガンはいくつかの理由から、この著作をかたり加筆訂正したい意向をもっていたが、彼の健康はすでにそれをすることを許さなかった。本書の内容およびモーガンの業績の中で

二「イーロイオイ・リーグ」

ロングハウスの人びと

モーガンの著書『イーロイオイ・リーグ』の内容に立入る前に、まずその原題名 The League of the Ho-dena-sauce, or Iroquois の意味ないし由来について説明して置かねばならない。ここでホーダヌソニ（Ho-de-nau-sauce）というのはイーロイオイ語で『ロングハウスの人民』の意であり、それはまた自称の民族名（し

部族連合体の名称）でもあった。ちなみに、イーロイオイ族は北米インディアン諸族の中

ちなりに、イーロイオイ族は北米インディアン諸族の中

のひとつで、構造法にあわせた間口の幅で平行に二列に立てられた列

間隔にいくつかの扉が設置されていた。このロングハウスは間口と

柱にアーチ状にわたった木枠を掛け渡し、その上を数本

の桁で押え、柱・アーチ状木枠・桁の交点を植物のつる

で繊り合せ、更に屋根にも壁にもトニーやなどの樹皮を張っ

たものであった。したがって外観はカマボコ型の家になっ

たが、場所によっては切妻型の屋根を掛ける所もあった。

一戸のロングハウスに住む人びとは、通常相互に母系

の血縁関係で繋がる人びとその夫たちから成立ってい

一七（一八七）
このロングハウスは婚姻や養取によって家族数が増えると簡便に建増すことができた。このようにロングハウスは広げていく事をイロクォイの人口増加を表していた。それはまた相互に親縁関係にある人びとの協力関係を増すことさえも意味していた。

三部は「リーグの附属事項」（Incident to the League）と題し、第一部第二部で取り上げられなかった諸問題について記述しているが、主な内容は、イロクォイ族の物質文化と言葉の問題である。しかも力点はむしろ物質文化に置かれている。イロクォイ文化を知る手掛りを与えてくれる。

なお、イロクォイ語の構成法、地名のつけ方などが簡略に述べられている。
（1）リーグの形成
モーガンによれば「イロックォイ族はメキシコとペルーのインディアンを除けば、他のいかなるインディアンより高度な社会組織をつくりあげ、多大の勢力を獲得した一民族であった。このモーガンの評価をそのまま受け入れるかどうか別としても、イロックォイ族がヨーロッパ人の到来以降、一七八世紀の北米の歴史において、極めて重要な役割をはたした種族であったことは確かである。そしてこの時期におけるイロックォイ族の大躍進は、モーガンの紹作を習い、彼らと共に戦争に出かけたり、モーガンの轟音をもって、防戦の戦争を追うこともいたことが確かである。
しかし、イロックォイ族はどのように経緯でニューヨークの中心部に移住し、やがて部族連合を形成するに至ったのか、これはは説明があり、必ずしも意見は一致しなかった。ただランフォイ族がどのような経緯でニューヨークの中心部に移住し、やがて部族連合を形成するに至ったのかについては、モーガンはおそらく次のような口伝伝承を記録している。

L・H・モーガンとイロックォイ・リーグ

一九（二八九）
民族の圧力に対してより効果的に対処するための一手段として、オノンガ族から提案される、他の四部族がこれに同調したのだという。したがって、以上のインタビューが形成されるとの効果は大きい。

東はニューギニア地帯の北端から南はカロライナの丘陵地帯に至るまで、その勢力圏を拡大した。一方、オランダの交易者がオランダに住んでいたが、これはイロコイの彼らにとって絶好の土地を占めていたのである。

一六四四年、オランダがハドソン川の領有権をイギリスに引き渡し、それを所持しはじめるとイロコイは彼らの集めた毛皮と銅と引き換えにヨーロッパの布や銃を手に入れた。銃を所持しはじめるとイロコイは彼らにとって絶好の地域の利を占めていたのである。

一方、オランダ人はオランダ人を含めてヨーロッパの商人からイロコイに新時代の幕開けがあった。つまりこの時、オランダ人がオランダとの間に友好関係が成立するようになった。そのために、オランダ人は北はオランダ、南はカロライナの丘陵地帯に至るまで、その勢力圏を拡大した。
（2）リーグの作り方

では北米における英仏植民地形成の時代に両国の力関係に多大の影響力を及ぼしたイロコイ・リーグなるモーガンも指摘するように、リーグの内部機構は外見上極めて不明聴であった。

リーグの意志決定機関あるいは実上の中央政府を形づくったのは、イロコイ五部族の各々から選出された五〇〇人の正首長（エレノ）から構成される首長会議であつた。この正首長の各々はその権力において同等で、各々が自分自身の出身部族に対して権力を持たれるものであり、五〇〇人が一体となってリーグ全体に支配権を行使するものではなかった。つまり各部族はリーグに対して、アメリカ諸州が合衆国に対するのと同等の関係を維持してそれぞれの正首長たちは定められた時に、通常は毎年秋に、事実上の政府所在地であるオンタリオで開かれる会議に出席した。ただし各部族における必要の生じた時には臨時会議が召集されたが、その場合、または他の部族領域でも開かれた。首長会議における決定は万場一致を原則とした。

リーグ結成から年月がたって、白人との交渉が頻繁に生じた。
四「リーグの精神」

イロコイ族の神々

イロコイ族は他の多くのインディアンと同様に宗教儀礼を尊重する種族である。本章でモーガンは彼らが信仰する神々とその諸属性を詳細に説明している。その説得力あふれる描写は、イロコイの人々の生活の真実や精神の世界を垣間見せてくれるのに充分である。

モーガンの神々は一種のバンテオンを形成していたが、その最高位に位置するのがハーウェンヌーと呼ばれる神である。それと同時に最高神であった人間及び人間に対する有用な動物を創造した神で、善な植物を創った神であった。この悪神は、もともと最高神の兄弟あるいは双生児であったともいう。最高神は悪神に対し進んで実力行使をするとはしないが、いずれたれも、これに打勝つ力を備えていた。善悪両神は、それぞれ独立の世界と固有の力をもっていた。
こうした表現は、もともと狩猟採集民であったイロクォイ族にとって、これらの栽培植物がもたらした恩恵がいかに大きかったかを示しているように思われる。

イロクォイ族の祭儀は最高神を中心とする諸神霊に対して、季節の変更やことに祭りを行った。彼らが一年の間に定期に行う祭りには次の六つがあった。

1. カデ祭り（The Maple Festival）
2. イチゴ祭り（The Strawberry Festival）
3. 植付け祭り（The Planting Festival）
4. 青トウモロコシの祭り（The Green Corn Festival）
5. 収穫祭（The Harvest Festival）
6. トウモロコシ、マメ、カボチャの成長を感謝する祭り。また、これらの祭儀はイロクォイ・リーグの首長会議と続く。

これらの祭儀はイロクォイ・リーグが構成する五部族の人々が一斉に集合して行うので、幾つかの部族の幾つかの村々で別れに行われる。

また、これらの祭儀の執行にあたっては、個々の役職者が選ばれ、役職の監督、進行、世話役を勤めた。役職の監督、進行、世話役を勤めた役職者には定員がなく、男女とも同じ資格でこの役に就くことができ、職務に忠実である限りその地位は継続した。ちなみに役職者の資格に役割の一つは祭りに先立って「悔い改めの会」を集会者が自己の悪行の告白をして将来に向けて改心を誓う会}
彼女の胸から生えたという。前述のようにイロクオイ族の社会は母系制であるが、その主要な神々は「白母」「姉妹」の三位一体である。これは、母神であるトウモロコシの神、メムの神、カポチョンの神が三位一体をなして一体であるとされている。

イロクオイ族の宗教において、トウモロコシの神は最も重要な存在である。ホクシの神が田作りの神であり、カポチョンの神が自然の神である。これら3つの神々は一体であると考えられている。

トウモロコシ栽培に関連して注目されるのは、モーガン市でのトウモロコシの栽培が、社会の中心であるということである。ここでは、トウモロコシの栽培が、社会の経済的、文化的な中心であり、社会の中心であり、社会の発展の鍵となると考えられている。

トウモロコシは、イロクオイ族の重要な作物であり、地元の食材の1つである。また、トウモロコシは、イロクオイ族の伝統的な食べ物である。トウモロコシは、イロクオイ族の伝統的な食べ物である。
あって、祭りの初日に絞殺された白犬が、五月の日の早
曉、多くの供物とともに焼かれるのである。これは一種
の無血供儀であるが、モーガンの見解では、この白犬は
人間の罪を償うための犠牲の羊ではなく、人々の変ら
ぬ忠誠と感謝の気持を最高神に伝えるために、人間から
最高神のもとに送られた使者であるという。
なお白犬の供儀に際してもタピオの霊が火に燎れられ
るが、タピオの香膏は人間が造物主である最高神と心を
かよわす媒介であった。また白は、イロコ族にとって
清浄と誠実を象徴する色であり、犬は、元来獣人であっ
た彼らの忠実なる友であり、彼らの忠誠心を表してい
た。
動物の霊を神への使いとして送るモーガンは、イロコ
族の熊送りなどにも通ずる要素であり、イロコ族に
おける狩猟民的な文化伝統と考えることができるのであろ
う。また動物の無血供祭はモンゴル族などにもみられた
習俗であった。

五
物質文化への関心
小文の始めに触れたように、モーガンは「イロコ族
の第三部で、イロコ族の物質文化的問題を
リーダー」とする必要がある。
六リーグの時代

周知のように、モーガンの社会進化論は、今世紀には民族学史におけるモーガンの位置づけは、改めて検討されるべきものである。

民族学史においてモーガンの位置づけは、改めて検討されるべきものである。

モーガンの社会進化論は、今世紀には民族学史におけるモーガンの位置づけは、改めて検討されるべきものである。

モーガンの社会進化論は、今世紀には民族学史におけるモーガンの位置づけは、改めて検討されるべきものである。
個々の家族員によって生産された物は、原則としてその家族内で消費されるのが、長制の段階になる。 SESSION が発生する状況は、一概にその家族の生産物のないことを指す。 SESSION の形を長制のもとに変えることが可能になる。そしてこの SESSION を通じて、消費者（家族）に再分配を求めるのである。しかし SESSION の威信は、この再分配（それは多くの場合、首長による大規模な形をとる）を通じて維持され、拡大されることになる。なお SESSION による再分配の専門化が進むと、この専門化をさらに促進し生産性を増大させる要因となる。というのである。
このような SESSION の規定を、イクロオイの社会においては考えてみる。それにイクロオイ各部族には多くの世襲首長がいて、その世襲首長たちの会議によりイクロオイの連合が成立していると考える。しかし SESSION 制の中に現れる平等性の強調ということはある。しかし、 SESSION 制は、ある意味で、生産の集中化を図っているというだろう。したがって SESSION の集中化が進むと、イクロオイ社会、あるいは、狩猟民国家、あるいは、親族の領域に基づいていない。異の社会のないという記述がみられる。イクロオイの社会を「狩猟民国家」と称しているのである。
イクロオイの研究は、現在でも北米の民族学者たちによって、新しい見地から考察されてきている。しかし、この研究を待つべきなのかかもしれない。しかし、東部森林帯の北部に向かうイクロオイの居住地にトウモロコシ栽培が導入されたのも、一つの「歴史的偶然」とする見解もあるのである。しかしこれらの間
 outlined studies 1984, state university of New York
the Retrieval, Interdisciplinary Approaches to Ho-
M.K. Fosler, J.Campbell, M. Weinland ed. Ex-
(2) Press, 1996, xii(1)

metrical Aborigines 1881 (The University of Chicago
L. H. Morgen, Houses and House-Life of the A-
(2) Press, 1996, xii(1)

(2) L. H. Morgen, Ancient Society 1881 (The Belknap
(2) Press, 1994, xii(1)

(2) L. H. Morgen, American Society 1877 (The Belk
(2) L. H. Morgen, Ancient Society 1877 (The Belknap
(2) Press, 1994, xii(1)

(2) L. H. Morgen, American Society 1877 (The Belk
(2) L. H. Morgen, Ancient Society 1877 (The Belknap
(2) Press, 1994, xii(1)

(2) L. H. Morgen, American Society 1877 (The Belk
(2) L. H. Morgen, Ancient Society 1877 (The Belknap
(2) Press, 1994, xii(1)

(2) L. H. Morgen, American Society 1877 (The Belk
(2) L. H. Morgen, Ancient Society 1877 (The Belknap
(2) Press, 1994, xii(1)

(2) L. H. Morgen, American Society 1877 (The Belk
(2) L. H. Morgen, Ancient Society 1877 (The Belknap
(2) Press, 1994, xii(1)